

平成 30 年度三重大学国際交流事業実施報告書（学内版）

1. 申請部局

学部・研究科名等： 人文学部

事業担当者の職・氏名： 教授・大河内朋子

内線電話番号： 9125

電子メール： tokochi@human.mie-u.ac.jp

2. 事業の名称（20 字以内，別に副題を付けても良い）

フィールドスタディー「ドイツにおける移民・難民問題と過去の克服」

3. 事業内容の別（該当するところにチェックを入れてください。）

教職員，学生の海外派遣（学会やシンポジウム等の出席は除く）

海外交流機関等からの教職員，学生の受け入れ

国際教育プログラムの開発や推進

その他

4. 事業の取組結果

(1) 事業概要 (簡潔に事業全体の概要がわかるように記述してください)

この事業は、「異なるものといかに向き合うか」をテーマとした人文学部特殊講義(後期集中2単位、履修対象2年生以上)として企画・実施した。授業全体は、事前研修(4回、各2時間程度)、現地研修(11日間)、事後研修(1回、3時間)という3つのファクターによって構成され、いずれのファクターにおいても、「移民・難民の受け入れと社会的統合」および「過去(負の遺産)の想起」という二つのテーマを取り扱った。

現地研修においては、ベルリン(強制収容所跡や迫害被害者記念碑などの見学)、ボーフム(トルコ系モスクやトルコ系住民集住地区、移民児童の多い小学校の見学など)、ハイデルベルク(難民ボランティアへのインタビュー、シンティ・ロマ博物館の見学など)の3都市に滞在し、見学後には学生間で討論を行った。

参加(履修)学生は15名(人文12名、教育1名、工学2名)であった。

(2) 事業の背景・これまでの実績

ある社会問題について考察するとき、その問題が起こっている現場を自分の目で見ることや、関係者から話をきくというアプローチが、文献講読による知見を補うものであることは言うまでもないだろう。とりわけ、専門課程前期に在学中の学生にとって、フィールドスタディによる新たな問題領域の発見や新たな研究視点の獲得などは、卒業論文のテーマにつながる可能性を秘めている。卒業論文につながらない場合でも、新たな視点や異なる価値観などを獲得して、参加学生の人間的なひろがりやに資する可能性がある。そうした教員側の教育的な思惑とならんで、学生側にも同様の希望があったことから、本事業を実施することになった。

平成27年度に始まった本研修は、毎年度実施され、今年度で4回目となる。過去の参加学生数は7~11名であり、どの年度の参加学生のなかからも、研修で取り上げた移民問題を卒論テーマとした学生や、研修後にドイツ留学した学生が現れた。

(3) 事業実施結果

「事後研修」における学生のレポート発表から判断すれば、学生たちは、ナチ政権下での迫害被害者記念碑の見学(ベルリン)や移民児童在籍率の高い小学校の見学(ボーフム)、そしてシンティ・ロマ博物館の見学(ハイデルベルク)など、過去および現在の歴史の現場に立って、その現場に関わっている当事者から説明を受けた場合に、もっとも強い刺激を受けたと考えられる。レポートおよびドイツでのディスカッションにおいては、繰り返し、「異なるものへと開かれていること」が議論された。「開かれていること」というキーワードは、デュースブルク(ボーフム近郊の都市)で訪れたトルコ系モスクを見学した際に、案内者が建造物としてのモスクの特色を説明するなかで使った言葉であるが、この言葉は、ドイツにおける過去の負の遺産を継承することへの取組や、移民の社会的統合への積極的な取組などにおいても、当てはまる姿勢であった。学生たちは、こうした「開かれ

た」姿勢を、たんにドイツにおける姿勢として理解しただけではなく、今後の日本社会の変化に対応する場合や、現在の日常生活において他者に対する際にも身につけるべき姿勢であると捉えたのであり、それにより、この事業は、ドイツ社会に関する単なる知識の獲得のための事業を越えたものになった。



「ナチ時代に殺害されたヨーロッパのシンティ・ロマのための記念碑」見学



参加学生間でのディスカッション



「殺害されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」での案内



移民児童在籍率の高い小学校で説明を受ける

(4) 事業の意義

上述のように、参加学生は、ドイツで行われている取組を単なる知識として獲得しただけではなく、日本における歴史認識や歴史教育、外国籍住民等のおかれた社会的状況などを視野に入れながら、比較考察していた。その際に、日本での状況を単純に「より後進的」として批判するのではなく、ドイツまたは日本において、なぜそのような教育が行われ、歴史認識になっているのかという背景にまでも踏み込んで理解しようと試みており、科学的な探求姿勢への助走を後押しすることができた。

(5) 事業の発展性

担当者の定年退職に伴い、同じプログラムでの継続はできないが、別の教員によって、ドイツでのフィールドスタディは継続される予定である。

(6) 中期目標・中期計画における位置づけ

中期計画2 学生の国際性の涵養を図るため、ダブル・ディグリープログラム、3大学ジョイントセミナー、海外インターンシッププログラムなどの学生の派遣・受入れプログラムを充実させる。また、名古屋大学と愛知教育大学等と連携してグローバル人材の育

成に取り組む。

(7) その他

なし。